

バルカン諸国反政府デモ拡大 (638号)

2026年 3月 石館

バルカン諸国では政府高官の汚職に対する不満が噴出し、反政府デモが広がっている。バルカンは19世紀初めオスマン帝国が後退した後バルカン分割を巡り帝国主義列強が対立、“ヨーロッパの火薬庫”と言われ、第一次世界大戦の要因の一つとなった。



バルカン半島は13世紀以降、オスマン帝国の進出によって、複雑な民族対立、キリスト教とイスラム教との対立など複雑な歴史的環境に置かれた。

19世紀にはオスマン帝国衰退に乗じた、東方問題と言われるオスマン帝国支配下のギリシャ人やスラブ系民族の独立運動に、オーストリアやロシアが絡んで対立するという図式が続いた。

1912年にスラブ系諸国がロシアの支援でバルカン同盟を結成したことはバルカン危機を一気に高めることとなり、同年第1次バルカン戦争（バルカン諸国対オスマン帝国の戦争）となってバルカン問題に火がついてしまった。ついでブルガリアの領土拡大の動きに他国が反発してバルカン同盟国家間の対立が生じた。

翌13年に第2次バルカン戦争（ブルガリア対セルビア・ギリシャ・オスマン帝国などの戦争）となった。この戦争はブルガリアの敗北で終わったが、各国とも領土的な不満を残すことになる。そして翌1914年、オーストリア・ハンガリー帝国支配下のボスニアのサラエボでオーストリーハンガリー帝国の皇位継承者であるオーストリア大公フランツ・フェルディナンドとその妻がセルビアの青年に暗殺され、オーストリア・ハンガリー帝国がセルビアに宣戦布告をして第

1 次世界大戦の引き金となった。バルカン半島は、ヨーロッパ南東部に位置し、トルコとイタリアの間に突き出た半島である。東は黒海、マルマラ海、エーゲ海、西はイオニア海、アドリア海に囲まれている。



第2次大戦中はドイツ、イタリアの枢軸国の支配が及んだが、解放に大きな力となったソ連の影響が強まり、戦後はギリシャを除き共産圏に組み込まれた。

ユーゴスラビアはチトーの指導の下独自路線を歩んだ。1989年の東欧革命で民主化、ユーゴ解体という激変が起き、その後も民族対立から混迷が続いた。東西冷戦が続く中、ソ連に追従する外交、官僚主義的な社会主義経済の停滞が次第に矛盾を深めていき東欧革命が吹き荒れ、ユーゴスラビアは解体され、2006年までにクロアチア、スロベニア、マケドニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、セルビア、モンテネグロがそれぞれ分離独立した。その間ボスニア内戦やコソボ問題ではイスラム教徒が関わっていた。

現在バルカン諸国では、汚職や若者の不満、地政学的な緊張などが原因で反政府デモが拡大している。特にセルビアでは、駅の屋根崩落事故をきっかけに政権の腐敗を訴える大規模なデモが続いている。



突然、駅の屋根が崩壊、下敷きになり14人が死亡【セルビア...

セルビアのデモは、ノビサド駅の屋根が崩落し、多数の死傷者が出た事故が発端である。この事故では手抜き工事や中国企業とセルビア政府高官との癒着が指摘されており、ブチッチ大統領率いる政権の親中路線や汚職への抗議が広がっている。

アルバニアでは政府高官の汚職疑惑を受け、大規模な抗議デモが広がった。バルク副首相がインフラ事業の入札で特定企業に利益を与えた疑いがあるとして、検察当局に起訴されたことがきっかけになっている。



バルカン諸国、反汚職デモ拡大で混乱 ロシアが政治利用も - 日本...

ブルガリアでは汚職の蔓延や増税案に対する大規模な抗議集会が 11 月下旬から開かれ、首都ソフィアではおよそ 15 万人が参加した。11 月 11 日に内閣総辞職に追い込まれた後も、司法改革などを求める集会が続いている。連立交渉による新たな組閣は絶望的で、26 年春にも前倒しによる議会選挙が実施される見通しだ。ブルガリアは 1 月 1 日ユーロを導入するが、政府の不在で波乱の船出となる。

多くのバルカン諸国では**共産主義時代からの腐敗体質が温存され、司法が政治の圧力を受けやすい**。政府高官に対する監視は十分に機能せず法の支配の定着は見通せない。各国の政治混乱はロシアに付け入るスキを与えかねない。ブルガリアの親口派政党は内閣の総辞職を受け、ユーロ導入の見直しを求める方針を示した。

小生が 2 度目のドイツ駐在は 1975 年から 81 年であったが、その当時チトーに率いられた旧ユーゴスラビア連邦共和国に何回も行ったことがある。当時はカリスマ大統領であるチトーはまだ存命で (1980 年死去)、スロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロ、セルビア、マケドニアなど 6 つの共和国で構成され、これら共和国では、民族や言語そして宗教などがバラバラであった。

その多様性は、ユーゴスラビアが“7 つの国境、6 つの共和国、5 つの民族、4 つの言語、3 つの宗教、2 つの文字、1 つの国家”と呼ばれるほどのものであった。これほどの多様さを抱えると、共和国同士や異民族同士で争いが起きやすくなるが、チトーはそんな困難な事情を抱えるユーゴスラビアを素晴らしく統率していた。当時はまだ治安や経済も安定しておりどこへ行っても美しい自然が保たれており食事も安く美味しかった。

しかし、1992年から1995年にかけてボスニア・ヘルツェゴビナで内戦が起きた。これはボシュニャック人とクロアチア人との戦いで、その後クロアチアはセルビア人勢力と同盟を結び、ボシュニャック人勢力と激しい戦闘を行った。正に血で血を洗う悲惨な戦いで多くの犠牲者が出た。結局 NATO によるセルビア側への空爆を含む介入で停戦となった。



クロアチアのドブロブニク、青色のアドリア海とオレンジ色の屋根瓦の対比が美しい。平和になった今は観光地として人気が高く、多くの日本人も訪れている。